

オーストラリアのサービスと人種差別

今年のオーストラリア・デー（1月26日）で演説した著名な中国系脳外科医が、「オーストラリアでは人種・民族差別は今も健在だ」と発言し、世間を動揺させている⁽¹⁾。この多民族国家の現状はどうであるのか、今日は自分の生活で感じたことをご報告させていただく。

オーストラリアでの生活に慣れるまでは、日本では考えられないようなサービス途上国であることにカルチャーショックを受けたものである。当時は、言葉の不理解によるもので、見掛けによる差別ではないだろうと理解していた。たとえば、日本では「お客は神様」と言うように、たいてい気持ちよく買い物ができるものであるが、オーストラリアでの買い物は、非常に不愉快なものだったのである。

まず、挨拶。日本では、店員が「いらっしゃいませ」、「ありがとうございます」と一方的に挨拶し、客は特別何も言わなくても済むことが多いが、オーストラリアでは、顔見知りではなくともまず、「会話」が求められる。特に丁寧な様子でもなく「お次どうぞ!」と店員と急かさされ、「お元気ですか?」から一通りの挨拶をし、清算を済ませる。おつりをもらう際には客が「ありがとう」を言うことが多く、店員は「よい一日を」などと言えばよいほうで、礼も何も言わずに次の客に対して「お次!」となる場合も多い。店員は、ガムをかんでいたり、知り合いの客とは、長蛇の列にもかかわらず、長いおしゃべりをしていることさえある。しかし、誰もクレームをつけようとはせず、のん気な様子である。

次に万引き対策。オーストラリアでの買い物の際には荷物検査というものがある。ホームセンターや電気屋には、出入りにセンサーが設置されているにもかかわらず、近くに店員が立っていて、カバンの中身を見せることが要求されるのである。とは言っても、一瞬開けて見せるだけで、すでに買ったものや、私物の電化製品が入っていたとしても、特に質問があるわけでもない。意味がないと思われるのだが、これはリュックバックを背負っている人は人種を問わず、誰でも見せなければならぬルールなので、あきらめて従うことにしている。

ところが、どうしても許せない検査がオーストラリアの空港で起こっている。爆発物検査である。長蛇の手荷物検査で、金属探知機をくぐった後、搭乗口まで急ぎたいのは誰でも同じだが、私はその後必ずといって良いほど検査官に止められる。それが爆発物検査である。

この検査は「ランダムに乗客のサンプルが選ばれる⁽²⁾」とされているのだが、私は見逃されたことがない。なぜこの検査が必要なのかという理由が日本語を含む多言語で書かれているプレートを私に見せようとするのだが、もう何度も見ているので、読まずに従うことにする。ただし、私は検査官にある質問することになっている。「毎回止められるのは、私がアジア人だからですか?」

その受け答えで、「日本人ですか? 英語が上手ですね、オーストラリアにはよく来るのですか?」などとごまかしながら検査をする職員、「まあ、気にするな、私もアジア人だよ、相棒」というアジア系職員。これならまだ許せるであろう。しかし、先日、プリズベン空港で許されないことが起こったのである。

いつものごとく、余分な検査で止められ、「私がアジア人だからですか?」と白人のオーストラリア人検査官に聞くと、なんと、「それは正当な理由だな」と回答したのである。私はとりあえず急いでいるので荷物を渡し、「人種で選ばれるのは、正当な理由とは思わない」というと、小声で「何で、さっきからそんなcrap(俗:くそ、たわごと、ごみ)みたいなことを言っているのか」といって荷物を検査していた。

これは、公的には使ってはいけない言葉である。しかし、彼は私の怒った顔色を見て、英語がわかる人間であることに気まぎらなくなったのか、通常よりは早く、爆発物結果の紙が出る前に「以上です」といって済ませた。時間があれば、さらに問い詰めたかったところである。

私は、すべてのオーストラリア人が差別主義者だとは言っているつもりはない。ただ、少ない荷物・小奇麗な身だしなみにもかかわらず、肌の色だけで不審者扱いする人が差別主義者だと言いたいのである。「ランダム」などとまさに「適当」な基準の選び方をするのではなく、検査をするなら全員する、しないなら全員しないことにしてほしい。あるいは、カウンターを使い、必ず20人に1回などとするならば公平である。

同様に多民族国家であるアメリカではどうだろうか。アメリカ系日本人、有道出人氏が北海道で人種差別訴訟をしていることは有名である。しかし、私は彼と違い、あらかじめマイクを忍ばせて録音を準備していたわけではない。

また、ハリウッド映画『マイレージ、マイライフ』(2009)では、「空港の税関ではシニアの後ろには並ぶな。時間がかかる。並ぶならアジア系の後ろに並べ。荷物が少なくムダがない。」—「それって人種差別ですよ」という会話があるように、アジア人という枠組みでステレオタイプを持つこと自体に人種差別であるとみなしているようだ。

昨年、ワルピリ族長老のステイーヴ・ジャンピジンバ氏と海外旅行中、ニューヨークの空港において、「オーストラリアから来たんだらう? 先住民だ? 珍しいな」などと親しげに話しかけるアフリカ系の空港職員がいた。これについては、ステイーヴは特に何も否定的な様子ではなかった。

一方、日本では純血のアボリジニの男性を見る機会は少ない。来日した際、彼は人ごみや電車の中などでしばしば視線を感じるといっていた。アメリカ人のように興味があるのなら話しかけたほうが、彼も気持ちが良かったのかもしれない。

私は日本ではマイノリティーとして差別されたことがないため、ここでは貴重な経験をさせていただいている。車から突然意味もなく罵声を浴びせたり、バスの中でアジア人に絡んでくるアングロサクソンの若者を見かけることも日本ではできない経験である。また、「建国記念日」を「侵略の日」と呼ぶアボリジニの声が聞けるのも多民族国家ならではの多様性である。

[註]

(1) Nichigo Online, <http://nichigopress.jp/ausnews/news/33326/>

(2) Australian Government Department of Infrastructure and Transport, http://travelsecure.infrastructure.gov.au/domestic/faq/airport_checks.aspx